

ちほの
おしゃべりタイム



BONSAI



オフィスPrima 代表
フリーアナウンサー
ビジネスマナー講師

とおる ちほ
透 千保

東海地方の各放送局(岐阜放送/ぎふチャン、FM GIFU、東海ラジオ、メ〜テレなど)で数多くの番組やニュースを担当。司会、ナレーションの他、名鉄電車、名古屋市営地下鉄など、公共交通機関のアナウンス放送に携わる。一方、企業・大学において、ビジネスマナー、電話応対などの研修講師を務め、人材育成に取り組んでいる。

漫画『サザエさん』で、カツオがいたずらして波平が大事にしている盆栽を壊してしまい、雷を落とされる場面がよく描かれていました。昭和の時代には、盆栽は中高年男性の粹な趣味として定着していたことが伺われます。

盆栽の起源はというと、平安時代から鎌倉時代にかけて中国から伝わったと言われています。当時は貴族や武士階級の間で高尚な文化として楽しまれていましたが、江戸時代になると、それが庶民にも広まっていきました。さらに明治期には政財界を中心に愛好家が数多く現れ、邸宅にも盆栽が飾られるようになりました。また、ウィーン万博やパリ万博などにおいて、海を越えて盆栽が出品されていきます。今や海外でも「BONSAI」として高い評価を受けているのは、こうした働きかけがあったからなのでしょうね。

盆栽は、もともとは「盆景」と呼ばれ、盆の上に砂や土、草木を配置して自然の景色を作った箱庭のようなものだったそうです。それがやがて日本人のメンタリティによって洗練され、小さな鉢の上の樹木が、壮大な大自然や、宇宙をも思わせるような精神性を表現する芸術へと高められていったのです。

大阪の阪急うめだ本店で開催された苔にフォーカスしたイベント「もこもこ MOSS LIFE」で、掛斐川町在住の情景盆栽作家・中尾浩之さんの作品を観る機会がありました。中尾さんは、家業の花屋でフラワー装飾1級技能士の資格を生かし生け花に携わるうちに、和の植物の表現に惹かれ、インテリアにもなる現代風な盆栽を制作されています。

手の平に乗るほどの小さな器の中に根を張った1本のもみじ。立ち上がった根元には、青々とした苔と細かな砂が敷き詰められ、それを見ていると、まるで自分が樹木の中に佇んでいるような錯覚に陥ります。いかに木を格好良く見せるか、どのように配置するかが腕の見せ所で、一つの空間として捉えるため、情景盆栽という言葉を生み出したそうです。また、樹木と鉢との相性を「鉢映り」と呼び、岐阜市の陶芸家・大野裕之さんの器とのコラボレーションで、トータルな芸術性を追求されています。

近年は、家にいる時間が増えて、マンションのベランダなどでも育てられるサイズの盆栽や、インテリアの一つとして小さな盆栽も好まれているようです。中尾さんによると、都会ほどその傾向は顕著だそうで、盆栽教室には、県外からも20代の女性が興味を持って参加されるとか。

小さな空間に広がる景色は、いつか見た風景のように、移り変わる四季やそよぐ風、自然の美しさが凝縮されていると言っても過言ではありません。小さな盆栽をデスクの傍らに置いて眺めるだけでも、よい気分転換になりそうです。